

家族は個体維持と種族保存の交点にあり、人間(とりわけ子供)が生きていくために必要不可欠のものである。第1回ではニューギニア高地人、第二回ではマサイ人の家族を見た。両者ともに男性優位がきわめて強く、妻や娘を客人に接待として差し出す社会である。見知らぬ客人に差し出された女性は楽しかったのだろうか？

今回は紀元前400年頃の人口約30万人というアテネで書かれたプラトンの「饗宴」である。古典中の古典で、しかも哲学の聖典の如くにいられている。饗宴が行われてから15・6年もたってから書かれたと言うから、筆者は冷静沈着に考えて書いたのだろう。しかし、酔っ払いの戯言のように感じるのは、愚かな現代人の理解力不足なのだろうか。

翻訳者が書いている序説で、「すなわちまず最初には一つの美しき肉体に対して愛を感じる、次には肉体的に美しきすべてのものに対し、(中略)美の原型ないし絶対美(の認識)に対する愛を体験するに至る。この最後の段階において働いているエロスは純粹なるヌース(全体を一挙に把握する直観理性)、熱烈にして生産力ある思考、すなわち『理性の情熱』とも称すべきものなのである。換言すればエロスは哲学的推進力、畢竟フィロソフィヤ(智慧の愛すなわち渴望)にほかならない。」といている。

ソクラテスは最後の登場人物アルキビヤデスによって絶賛されるが、ディオティマに「人がこれら地上のものから出発して少年愛の正しい道を通って上昇しつつ、」P134と言わせ、アルキビヤデスが「ソクラテスはいつも美少年を愛し、常に彼らのために多忙でありまたこれに夢中になっている」P146といているように、ホモのスケベ親父なのではないだろうか。肉体の美から精神の美へと高まるが故に、その前提として少年のお尻を追いかけることは素晴らしいことなのだという。それは現代の男女間の恋愛が美化された構造と全く同じだろう。

奴隷の存在が不可欠で女性の権利が皆無で、繁殖のためのセックスが肯定されるように、文化伝承のためのセックスも肯定されていた。学校のない時代、精液を介して成人男性から少年に文化が伝達された。文化の伝承と生命の伝承は、精神と肉体の違いに帰結する？古代ギリシャ文化とは何だったのだろうか？<ディオティマはかりに歴史上の人物であったとしても、このディオティマは深い意味においては詩人プラトンの創作と考うべきであろう。けだしプラトンはこの人物を導入することによって、この所説がソクラテスよりもむしろ自身のものであることを暗示しているものと想像される。>という訳者は時代錯誤では。強い男性優位の社会では、花魁が高度な文化人だったように、高級娼婦ディオティマも優れた文化人だった！

匠 雅音

第4回

2023.12.16

主 トニ・モリソン「青い目がほしい」早川書房 2001年(1970年)

副 マイケル・カニンガム「この世の果ての家」角川文庫 1992年(1990年)